

挨拶が教えてくれたこと

南陵中学校2年

堀内 萌衣

私がこの家に引っ越してきたのは小学2年生の時で、亡くなった祖父が大きくなった私達にアパートではそろそろ手狭になってきただろうとゆずってくれた家だ。母はこの家に引っ越ししてくる時に、しつこくこう話してきた。

「今日から住む家はご近所さんもたくさんいるし、家と家が近いし、昔からずっと住んできて、この土地をととても大切にしてきた人が多いから挨拶だけはきちんとするんだ

よ。ご近所さんかもしれないし、何かあった時に助けてくれるかもだからね。」

と話してきた。私は正直、それが嫌だった。なぜなら、ご近所さんと顔を合わせると、おじいちゃん元気か、どうしているか、お父さんの仕事はうまくいっているか、そんな事ばかりをご近所さんは私に聞いてくる事があったからだ。そんなことどうでもいいじゃん、と心の中でつぶやきながらも、母に言われたとおり、あいさつだけはし続けた。母はそんな私の気持ちに気づいていたのか、ご近所のおじいちゃん達に、「中村のじいじいズ」とおもしろいあだ名をつけて毎日のように、「今日もじいじいズに挨拶できました？」

と聞いてきた。私はいつも笑いながら、もちろんと答えていた。

そんなある日のことだ。私がいいつも通り学校に自転車で行こうとすると、交差点から突然軽トラックが現れてぶつかってしまった。私は体の痛みと、突然の出来事で、恐怖で

パニックになってしまい、その場にうずくまることで精一杯だった。そこに、近所のよく見るおじいちゃんがやってきた。体の痛みと緊張であまり覚えていなかったが、

「堀内さん家の子供じゃろ？大丈夫か？」
と言って救急車を呼ぼうと言ってくれた。また不安になっていると今度は母が走って別のおじいちゃんとやってきた。母も気が動転していて玄関を閉めてくるのを忘れてきたと言った。一緒に来たおじいちゃんが閉めに行ってくれたのをなんとなく覚えている。今度は母が父に電話をかけているが父は仕事中心なので電話にまったく出ない。母は動揺したまま、どうしよう、どうしようと言っている。それを聞いたまた別のおじいちゃんが父の職場に行つて父をよんできてやろうと話していた。そうしている内に、救急車が到着し、私の体を見てくれた。たいした傷ではなさそうだし、救急車で病院に行くほどでもないと言われたので私は安心して涙がでてきた。

なんとなく顔をあげてみると、いつも挨拶をしていたおじいちゃん達4、5人が集まっていた。

病院から帰ってきて、一連の出来事を家族と話した。その時に母がこう言った。

「いつもあいさつをしていたから、つながって、顔見知りになって、心配になって助けてくれたんだね。」

私はその時思った。挨拶は人と人をつなげるもので、時に助けてくれるものにもなる。

私は中学校に行くとき「おはよう」の一言に勇気がいる時がある。あまり仲の良くない友達や、少し気まづくなった友達に会うとなかなかその一言が出ない。でも、頑張ったその一言を出そうと思った。なぜならその一言が、友達と深くつながるきっかけになるかもしれないし、私や友達を助ける一言になるかもしれないからだ。その事を教えてくれたじいじいずにはとても感謝している。

戦争のない平和な世界に

比良松中学校2年

山崎 麻央

今年の夏休み、私は家族で鹿児島県へ旅行に行った。その時、知覧特攻平和会館を訪れ胸がしめつけられるような気持ちになった。そこには、たくさんの手紙や海に沈んでいた戦闘機などがあった。知覧特攻平和会館とは、鹿児島県南九州市知覧町郡にある歴史博物館で、第二次世界大戦末期に編成された大日本帝国陸軍航空隊の特攻に関する資料を展示している。特攻隊とは、太平洋戦争の末期に日

本軍が編成した生還を期さない攻撃部隊のことである。航空機などを爆装し、搭乗員もろとも敵艦に体当りした。

平和会館の中にあつた多くの手紙の中にはこれまで育ててくれた家族への感謝の気持ちや、国のために命を捧げることへの喜びの言葉が綴られてあつた。本当にそう思つていたのだろうか。将来の夢ややりたいこと、死への恐怖心はなかつたのだろうか。そんなことを思うと、悲しい気持ちになつた。戦争中は自分の考えや思いを正直に手紙に書いたり、話したりすることは許されていなかった。このことは、当時の人達の人権が守られていなかったということである。

先日、私は「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」という本を読んだ。この本は、汐見夏衛さんが書いた戦争中の日本にタイムスリップした現代の女子高生と特攻隊員の青年の切ない恋の行方を描いた物語である。この話に登場する特攻隊員達

もいよいよ明日日出撃するという日の夜、出撃が決まったことを喜ぶ人や家族に会いたくて逃げ出す人がいた。そしてこの逃げ出すとする人を非難する人や黙って見逃す人が登場する。きつと、様々な思いを抱えていたのだろうかと思う。

特攻隊員として出撃した人達の年齢は十七才から三十二才で平均すると二十一才だと書いてあった。現代の高校生や大学生と同じくらいの年齢で私達とあまり変わらない年の人達が特攻隊として命をかけていたことに胸が痛む。本当は大切にされるべきだったたくさんの命が戦争によって奪われたことに怒りが込み上げてくる。

祖父から聞いた話によると、私の曾祖父は東南アジアのミャンマーで亡くなったと聞いている。亡くなった知らせと同時に送られてきた骨壺の中には石ころが一つ入っていた。ただけだったそう。当時祖父は三才だった。こんなに小さな子どもを残して、戦地で

命を落とした曾祖父はどんな気持ちだったのだろうか。父親を亡くして生きていかなければならなかった祖父はどんな気持ちだったのだろうか。戦争は、戦争に行かなければならなかった人や残された人の人権をも奪ってしまふ。

しかし、国民の人権を奪うのと同時に他国の人々の人権も奪っている。第二次世界大戦中の日本は、中国や韓国、東南アジアに侵攻している。そして、それらの国々に住む人々の人権を奪ってしまった。戦争は攻める側も、攻められる側もそれぞれの国の人々の人権を奪ってしまう。そんな戦争を再び起こしてはならないと強く思う。

しかしながら世界では、戦争が今でも行われている。ロシアによるウクライナ侵攻、パレスチナ問題、アフガニスタン紛争など私たちに直接関係のない所でたくさんの方が戦争によって苦しんでいる。それらの国々では小さな子ども達は学ぶ権利すら与えら

れず、銃を持って人を殺せと教えられていることもがあると聞いたことがある。

戦争が起きる主な原因は、宗教の違い、民族や文化の違い、政権への不満、領土・資源の奪い合いなどがある。このことは、自国と他国、自分と他人の違いや互いの価値観を認め合うことができないということだ
と思う。

戦争は、最大の人権侵害であり、差別と言われる。戦争では、人々はさまざまな権利を制約されたり、否定されたりする。また、最も基本的な人権の一つでもある「生きる権利」さえも脅かされる。これは、人権侵害の差別と同じと言える。

戦争をなくすために私たちができることは、互いの違いを認め合い、自分と同じように周りの人のことも大切にしようとする気持ちを持つことだと考える。

人権とは、人が人として社会の中で自由に考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権

利のことだ。すべての人が生まれながらもっている権利である。私たち一人一人がこの人権を大切にし、互いを尊重し合うことで戦争のない平和な世界になるだろう。戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを決して忘れずに生きていきたいと思う。

性だって一つの個性

十文字中学校一年

中山 月乃

私には好きな人がいます。よく気が利き、一緒にいると安心できる、大切な人です。

さて、あなたはこれを聞いてどんな人か、思いつかべましたか。人気者な男の子、聞き上手な男の子、行動力のある男の子。そう、ほとんどの人が「男性」を思い浮かべたことでしょう。それが今の日本の現状、そして課題だと私は思うのです。

まず、みなさんは「LGBTQ」という言葉を知っていますか。「聞いたことはあるが、意

味はわからない」という人もいるかと思えます。説明するとLレズビアン（同性を好きになる女性）、Gレズビアン（同性を好きになる男性）、Bバイセクシュアル（両性を好きになる人）、Tトランスジェンダー（生まれたときに割り当てられた性別にとらわれない性別の在り方を持つ人）、Qクエスチョニング（自身の性自認や性的指向が定まっていない人）の頭文字をとったものです。一言でいうと、幅広い性の在り方を表した言葉という事です。この意味をわかった上でもう一度考えてみてほしいのです。最初に話したことを。世の中には約八パーセントのLGBTQの人々がいるのです。そういった人々への配慮はできていましたか。

中には自分にとって普通ではないからといって、「気持ち悪い」と思う人もいます。これは私の実体験になります。小学六年生のころ、一度、女の子を好きになったことがありました。ですが、一人で抱えこむのが辛く

なってしまったとき、一番仲の良かった友だちにそのことをカミングアウトしたのです。そして返ってきたのが、

「なにそれ、気持ち悪い。」

でした。そういう人もいるのはわかっていたし、親友だから理解してくれると思いきや、否定された私は悪かったです。やはり、否定されたときはもっと辛くなってしまいました。そしてその子への片思いはあきらめるしかありませんでした。でも、こういった経験をしたからこそ、自由に生きられる社会がいいと思うのです。だから、理解して寄りそってほしいです。りんごの皮と果実では色が違うように人間も外側と内側では違います。だから、見た目で人を判断してほしくないのです。難しいことですが小さなことから変えていきましよう。

例えば、女性に相手がいるのか聞きたいとき「彼氏」という言葉はあまり使わないことを意識してみてください。女性だから男性

のパートナーがいるわけではないということが当たり前になっていくと思います。ぜひ日常で試してほしいです。

このように、「性」の在り方は、みんな顔が違うように人それぞれです。それを否定する人がいると、その人の幸せをうばうことにつながるのです。そうしないために、性も一つの個性ということを頭に入れてほしいのです。言葉を選ぶだけでその人の幸せにつながるということも。そして、「LGBTQ」の人々を受け入れることができる、自分らしく生きることができる社会を、みんなで作っていきましよう。

皆が笑顔で暮らすために

甘木中学校3年

舟木 心

「いじめをしてはいけない。」

これは誰もが一回は言われたことがある言葉だと思います。この言葉を聞く度に、「自分はいじめなんてしないから大丈夫。」と思う人も多いでしょう。でも、そもそもどこからがいじめと判断されるのでしょうか。

私は、小学校の時、友達に自分の物を隠された事があります。何回もそれをされる度に、どうしようもなく嫌になり、先生や家族に話を聞いてもらった事を覚えています。

でも、こんな出来事もありました。私が少しからかうつもりで言った言葉で、友達を傷つけてしまいました。私は、このくらいで相手が嫌な気持ちになると思っていました。でも、後になって、これはいじめと同じ事であり、物を隠してきた人たちと同じ事をその友達にしてしまったのだと分かりました。

私は、この体験から考えた事があります。それは、人によって物事の重さや感じ方が違い、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまいかもしれないという事です。そして、何がいじめで、何がいじめでないかは、一人一人違うという事です。物を隠されて、いじめだと深く悩む人もいれば、ただのいたずらだとあまり気にしない人もいるかもしれません。でも、私がしてしまったように、悪気はなく軽い気持ちでも、その一つの言葉や行動が誰かを深く傷つけてしまう事があると感じました。

私はこれから、自分と他の人とで物事に対する感じ方や捉え方が違う事を頭に入れ、自分の行動に責任を持てるようになりたいです。また、悪気はなくても誰かを傷つけてしまうことがあったら、自分の間違いを素直に認めて、謝ることも忘れないようにしていきたいと思います。

最後に、この作文を書く前までは、「人権を守る」ということはどういう事なのかあまり考えていませんでした。だから、とても難しい事を考えさせられているのだと思っていました。でも、この作文を書き進めるにつれて、「人権を守る」ことは簡単で、今すぐにもできることがたくさんあると分かりました。例えば、「ありがとう」を言ったり、自分と違う意見があれば、それを排除するのではなく、認めたりする事です。

平和な世の中にするために、まずは家族や友達など、自分の身の回りの人が皆笑顔で暮らせるようにしていきたいと思います。